

CONFESSIONS OF AN
ENGLISH OPIUM-EATER
AND THE
ENGLISH MAIL-COACH

BY
THOMAS DE QUINCEY

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY
E. NAGASAWA

TOKYO
KENKYUSHA

1923



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十二年十二月十五日印 刷 大正十二年十二月廿日發 行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎
主 幹 者 市 河 三 喜
發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎
東京市麩町區富士見町六丁目七番地
印 刷 所 研 究 社 印 刷 所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社

東京市麩町區富士見町六丁目七番地
電話九段一五七〇・三八二二番
振替口座東京二八六〇一番



非 賣 品



INTRODUCTION

I. DE QUINCEY 略 傳

Thomas De Quincey は七十四歳の高齡を保つたのであるが、其生涯の三分の二は餘りよく知られて居ない、二十三歳迄のことは *Confessions* や彼の自叙傳的の書き物 (それは Masson の全集の初の三巻になつて居る) の中に彼自ら書いて居る。で、彼の書いて居ることは大體に於て眞實であり、殊に重要な出來事に就いては眞であるを認められて居る。

De Quincey の家柄はもとは貴族であつて、彼の祖先は William the Conqueror と共に英國に來たのであつた。十三世紀に Earl of Winchester になつた De Quincey も幾人かある程で、重要な人物もあつたが、其後零落してしまつた、そして貴族的な 'De' はその苗字から取去られた。

De Quincey 自身はさう云つては居ないけれど、De の字 (尤も彼は小文字で de と書いて居た) を挿入したのは *Confessions* の作者の母であるやうだ。兎に角彼の父は Thomas Quincey と呼ばれて居た。父のことを De Quincey は "literary to the extent of having written a book" と書いて居るが、此人は 1775 年に *A Short Tour in the Midland Counties of England, performed in the Summer of 1772: together with an Account of a Similar Excursion undertaken September 1774.* と云ふ長い名の然し餘り大きくない書物を London で出版した。此人が Miss Elizabeth Penson と云ふ家柄のよい婦人と結婚して八人の子女を儲けた。其内で本書の作者は第五番目の小供で第二番目の男の子であつた、そして 1785 年八月十五日に Manchester に生れた。De Quincey が六才の時一番上の姉の Elizabeth

が亡くなった。此姉を彼は非常に好んで居たので、此出来事は幼い彼に深い印象を残した。彼が生れると間もなく一家は今日では Manchester の一部であるが當時は Manchester から數哩離れた所にあつた The Farm と呼んで居た “pretty rustic dwelling” に移り住む様になり (Manchester に營業所は依然持つて居たのである)、その後 1791 年か 1792 年になつて、一層大きな屋敷の Greenhay (hay は古い意味で hedge とか hedgerow とか云ふことである) に住むやうになつた。彼の少年時代は此二つの家で過されたのであつたが、彼は身體の小さい恥しがりで神経質なそして夢見ることの多い小供であつたと思はれる。

Farm 時代に彼は自分の好んで居た Nurse に就いて不思議な夢——自ら “a remarkable dream of a terrific grandeur” と書いて居る——を見たこと云ふ所から察すれば彼の夢見る癖は生れつきであつたのである。Elizabeth の死を経験したのも亦此家であつた。1792 年に “Greenhay” に移つた頃は De Quincey は七才であつたが、彼は父と會ふことが極めて稀れで、もし途中ででも出會つたなら御互に分らなかつたたらうと自ら誌して居る。彼の父は壯年の頃肺結核になつたので、商賣上の仕事をしながら、出来るだけ Lisbon, Madeira, 或は何處か西印度諸島の中に滞在する様にして居たのであつた、そして Greenhay に一家が移つて間もなく父が歸つて來ること云ふ報知を受けたが、彼の歸つたのは死にに歸つた様なものであつた。父の死ぬ迄數週間 De Quincey は一番多く父の傍に呼ばれた、そしてその臨終の際にも外の小供達と共に父の傍に待つて居た。

主人の死によつて一家は以前よりは貧しくなつたが、それでも年に 1600 pounds の収入があつた。小供達が成人する迄母と Manchester 附近に住んで居る父の友人數名とが後見人に定められた、然し實際の處置は重に母の手でされたのであつた。De

Quincey の母と云ふ人は交際上手な上品な趣味を持つた、そして文學の才のある知的な婦人で、彼女が友人に送つた手紙が集められて出版されたならば、そのキビキビして雅致のある點で決して Lady Mary Wortley Montagu (1689-1762. 女流作家で、詩や評論も著したが、その旅行を知らせた手紙は當時洛陽の紙價を高からしめた) の手紙に劣らないことが知られたであらうと彼は云つて居る。然し一面非常に嚴格な所があつて、彼の必要とした優しい同情的な取扱を彼に與へることが出来なかつた。

夫の死後四年の間即ち 1792 年から 1796 年迄未亡人は子供の教育に全力を盡しながら Greenhay に住つて居た。De Quincey は幾才位から讀書を始めたか分らないが、彼を最初に魅したものは *Arabian Nights* の Aladdin の話であつたと云ふ。父が死んで間もなく De Quincey は Manchester の Salford と呼ばれる所の curate である the Rev. S. H. と云ふ後見人の一人から毎日學問を習つたのである。約二哩の道を彼は朝出掛けて行つて午後に歸つて來るのであつた。此人の所へは彼の兄の William De Quincey も一所に通つて勉強したのであつた。William は十二才で彼より五つも年上で、之迄は父と共に Lisbon に居、それから Lincolnshire の Louth の Grammar School に行つて居たのであつたが、父の死後 Greenhay に歸つて來たのであつた。此兄が悪戯にかけては天才的であつて、De Quincey を非常に困しめた。De Quincey は S. H. から Latin をよく學び又 Greek の初歩をも學んだ。

1796 年のいつ頃か、De Quincey の母は Greenhay の家屋敷を賣拂つて、Bath に移つた。それで De Quincey も Bath Grammar School に入學した。此時彼は十二才であつた。此學校には約二年間居たが、Latin がよく出来るので評判であつた。殊に Latin で詩を作るのは上手であつたので、校長は彼の作を五つも六つも年上の學生に示して彼等の出来ないのを叱るのであつた。Greek の

方では最初は他の生徒より少し遅れて居たが、間もなくこれも話すのも書くのも上手になつた。所が 1799 年の初頃 Master の一人が外の學生を打たうとして誤つて De Quincey の頭を杖で打つたので、家へ歸つて數週間醫者にかゝつて治療せねばならなかつた。癒えて後校長其他がしきりに學校へ歸らせようとしたけれども母は頑として應じなかつた。終に彼は宗教上の理由で Wiltshire の Winkfield の私立學校へ送られた。Confessions の中で “block-head” と云はれて居るのは、此所の校長の Mr. Spencer のことである。茲で一年程過した時に Lord Westport の招待を受けて、一所に Ireland を旅行した。De Quincey が Bath で病氣の保養をして居た頃、Lord Westport は家庭教師と共に Bath の近くに来て居た、そして二人は友達になつたのであつた。Lord Westport は第三代目の Earl of Altamont で、後に Marquis of Sligo になつた John-Denis の一人息子であつた。De Quincey は彼に Eton へ招かれそこから、家庭教師と共に三人で旅程に上つたのであつたが、Eton に居る間に、近くの Frogmore に御出になつて居た George III. 陛下に Lord Westport が一所に拜謁し、陛下から色々の御下問に預つたこともあつた。此旅行から歸るさ、(1800 年の末であつたが) 嫌であつたにも係らず Manchester Grammar School にやられた。Confessions に “a sound, well-built scholar, but coarse, clumsy, and inelegant” と書いて居るのは、此所の校長の Lawson 氏のことである。彼は此學校でも頭角を現はしたけれども、sensitive な彼には此所は非常に不快であつた様に思はれる。で、彼は後見人に頼んで、此所を出ようとしたけれども許されなかつたので、Lady Carbery から 10 磅を得之を持つて、さうさう 1802 年七月に密かに此所を逃げ出した。彼の一つのポケットには英詩集、も一つのポケットには Euripides の端本が一冊あつた。此時彼の年は十七才であつた。

Manchester School を逃げ出す時の彼の考へは Lake District の方に行くこであつた。彼を惹き付けた力は Wordsworth であつた。Wordsworth の詩を彼は幾つか讀んで感嘆して居たのは云ふ迄もない。此大詩人の心を動かした自然はどんなであらう。彼の住んで居る家はどんなであらう。彼はどんな人であらう。出来るなら會つて見たい。かう云ふのが De Quincey の心持であつた、けれども彼は學校を逃げ出した少年が、突然かゝる人を訪ねるこの不穩當であることをよく知つて居たので、危惧の念を抱きながらも一先づ母の所へ歸ることに決心した。母は此時は Bath に厭きて Chester の Priory と呼ぶ家に移つて居た。二日かゝつて四十哩の道程を歩いて彼は Chester に着いた。丁度折よく叔父の Penson が印度から歸つて居て色々さりなしてくれたので、彼の豫期以上に都合よく事が運んだ。結局彼は一週間に一磅づゝ貰つて Wales 地方を旅行することになった。

1802 年の七月から十一月迄彼は North Wales の方を放浪した。或時は善い旅館に泊り、或時は農家の客となり、又或時は野宿をして一磅の金で一週間を送る様に工夫した。然し彼は非常に愉快な生活であつたと云つて居る。1802 年十一月の末つ方彼は Oswestry の二人の法律家の知人から十二ギニーを借りてロンドンに向つた。家からの送金を斷ち母にも後見人にも自分の居所を知らせなかつた。ロンドンに於ける彼の生活は悲慘なものであつた。彼は自ら此時代を生涯に於ける “impassioned parenthesis” と呼んで居るが、此時代になめた艱難辛苦と Wales 時代に身體にした無理とは、遂に彼の健康を害するに至つた。彼は此時得た病氣より起る苦痛を減ぜんが爲に、後に阿片を飲用し始むるに至つたのである。此時代の出來事は *Confessions* の中で美しい筆致で正直に物されて居る。他に人の泊らない空家の様な家の一番表に近い所に藁の上に眠る十才の哀れな少女のこゝろや、猶太人の金貸

Dell そのいきさつ、さては Oxford Street の Ann のことなぞ小説以上に興味ある物語りである。これらのことは初めて發表された時から事實か否かを疑ふ人もあつたが、De Quincey 自身は事實であると辯解して居る。自分は whole truth を話しては居ない、そんなことは不可能である、然し自分は truth の外何も云つてゐない、彼は云つて居る。實際 Page によつて出版された De Quincey の Private Letters と此等の記事を比べると、時々時日がぼんやりして居る外には全然一致して居る。ロンドンの放浪時代は彼の十八才の時のことである。當てにした Lord Altamont が居なかつたので、適當な保證人がなくて Dell から金を借りることが出來ず、非常に困つて居た時、不思議な事情で友人に發見され、呼返されて Chester の Priory に居る母の許に歸つた。印度の叔父はまた居た、そしてこの人のさりなしで一年百磅の學費を貰ふことにして 1803 年の秋に Oxford の Worcester College に入學した。

De Quincey の Oxford 生活のことは餘りよくは知られて居ないが、彼が Worcester College に入らずに Brasenose College に入つたなら (Manchester Grammar School から順當に來れば此所へ入るのである)、彼はもつと愉快に幸福に暮すことが出來たらうと思はれる。此所では殆ど一人ぼつちで日を送つた様に見える。で當時の學長の Dr. Cotton は彼のことを次の様に云つて居る。

“During the period of his residence, he was generally known as a quiet and studious man. He did not frequent wine parties, though he did not abstain from wine; and he devoted himself principally to the society of a German, named Schwartzburg, who is said to have taught him Hebrew. He was remarkable even in those days for his rare conversational powers, and for his extraordinary stock of information upon every subject that was started.”

(彼は此所に居る間は、靜かな勉強家として一般に知られて居た。

彼は酒は飲んだけれども、酒飲仲間に入ることは稀れであつた。彼は重にシュワルツブルグと云ふ獨逸人と交際して居た、此獨逸人は彼にヘブライ語を教へたのだと云ふことだ。De Quincey は既に當時でも座談の上手なひと、どんな話を始めても、その題目について非常に豊富な智識を持つて居ると云ふ點で著名であつた。

彼は大學の内外で非凡の人として知られては居たけれども、餘り交際もせず、靜かに獨り讀書に耽つて日を暮した様である。尤も彼が獨り引込んで居たのは、金が足りない爲めではなかつた。一年百磅では苦しい經濟であつたが、彼は此時になつて Dell から金を借りることが出来たので、Oxford student として comfortable に暮すことが出来たのであつた。書物を買ふことも出来たし、時折ロンドンに行くことも出来たし又 Liverpool や其他の友人を休暇には訪問することも出来た。彼が Schwartzburg から習つたものは只に Hebrew はかりではなかつた。彼が獨逸語を熱心にやり始めたのは Schwartzburg に就いてであつた、そして此時から獨逸文學と獨逸哲學とは彼の心を強く惹いたのであつた。此時代に於て注意すべき更に大切なことは、彼が英文學を組織的に研究し始めたことである。此迄までも英文學の偉大なことを感じ、英國の詩人や散文家の作を随分讀んだのであつたが、彼が英文學の知識を纏めることの必要を感じ、それを個々の輝いた星の散在して居る大空と見ないで國民思想の大なる流れと見る様になつたのは、此時代であつた。此流れは今や Wordsworth と其隨従者によつて新しき生命と力とを加へたのであつた、そして De Quincey の最も熱心と興味とを持つたのは實に此時代即ち彼と同時代の文學であつた。此時迄に彼は Wordsworth と文通して、少くとも二通の返書は彼の崇拜して居た詩人から受取つて居たのであつた。Wordsworth は有望なる青年の稱讃を喜んで受け、都合よき時にいつでも喜んで會はうと云つて來たのであつた。又彼は Words-

worth さ一所に 1798 年に、*Lyrical Ballads* を出した Coleridge にも惹き付けられて居た。彼が Coleridge の散文に惹き付けられたのは、自分の天分が詩でなく散文にあることを自覺して居た爲である様に思はれる。そして Coleridge は Wordsworth より一層近づき易い人の様に思はれたので、Coleridge が 1805 年に Lake District を去つたのは彼にさつては大なる失望であつた。

De Quincey の Oxford 時代に於ける最も大切なことは、彼が阿片を飲み始めたこと云ふことである。Neuralgia (神経痛) にかゝつて一二週間苦しんで居たので、友人の勧めに従つて、ロンドンへ行つた折 Oxford Street の藥種店で阿片丁幾の一瓶を買つたのは 1804 年の春か秋の雨の降る日であつた。これが病み付きで彼は此後は殆ど阿片を身邊から離すことが出来なかつたのである。醫者の説によると、彼は Wales や London の放浪時代に悪い食物を取つたり食物が不充分であつたりした爲め、胃に緩漫な或は間歇的な潰爛を生じたので苦痛を引起すのであるが、阿片を用ゐることをやはらげることが出来たのたこと云ふのである。然し此時代に彼の用ゐた阿片の分量は非常に僅かで、これをやめ様と思へはいつてもやめることが出来る位であつたこと彼自ら云つて居る。

De Quincey は B. A. の degree を得る爲に筆記試験を受けた、そして其出来栄は非常によく、もし口頭試験にも同様な出来であつたならば、University で第一等の成績であらうとのことであつた。然るにきまりが悪くていやであつたか又は何か癪にさつたところでもあつたか、彼は遂に口頭試験を受けないで一時姿を隠してしまつた。これは時日ははつきりしないが 1807 年のこの様に思はれる。1808 年には尙 Oxford には居たけれどもよくロンドンへ行つた、ロンドンでは Charles Lamb とも知合になつた、そして Grassini の歌を聞きによくオペラへ土曜の晩などに行つた。此頃法律を勉強する爲に Middle Temple

の member になつて居たか或はならうとして居た。彼の母は此時分には Bristol から十二哩程離れた Somersetshire に移つて居たので、彼は此地方へも屢やつて來た。彼は此頃大金を手に入れて居た。さうして此金が入つたかははつきり分らないが、1806 年には彼は丁年に達してゐるから自分の財産を比較的自由に使ふことが出来たのかも知れぬ、或は又やがて自分の財産となるべきものを抵當にして新しく猶太人から大金を借りたのかも知れぬ。1807 年の夏 Somersetshire に行つた時、Coleridge が外國から歸つて來て、同じ County の Nether Stowey の友人の家に逗留して居ると聞いたので、De Quincey は此偉人に會ひに出掛けした。Nether Stowey には居なかつたが、Bridgewater と云ふ町で面會した。Coleridge は妻と三人の子供とを連れて此町の友人の家に逗留して居たのである。詩人は喜んで彼に會つた、そして De Quincey は Coleridge の博學に驚嘆した。Coleridge も De Quincey も共に阿片を飲用して居たのであつたが、阿片丁幾のことがふと De Quincey の口から出た時、Coleridge はその害毒の恐ろしいことを話して警告したと云ふ以外には、阿片に就いては互に何も語らなかつた様である。Coleridge に對する De Quincey の尊敬は父に對する如きものであつた。數週間の後、Coleridge は London で講演の爲め一所に行くことが出来なかつたので、De Quincey が頼まれて Mrs. Coleridge と子供達とを Lake District に送つて行つたのは彼の大きな喜びであつた。途中で一行は Grasmere の Wordsworth の家で二三日休息した、これ迄に De Quincey は二度程此地方へ來たのであつたが、Wordsworth に面會する勇氣はなかつた。然し今度は、彼は Mrs. Coleridge や子供達の附添ひとして、日頃あこがれて居た詩人の家を訪れ、詩人から溫い歡迎の握手を受けた。詩人と語り、詩人の妻や妹の Dorothy に會つて彼の喜びは非常であつた。此時 De Quincey は Mrs.

Coleridge の introduction で Southey にも會つた。これは 1807 年の十一月中のことであつた、其月の終らぬ中に彼は Bristol に歸つた、そして Coleridge が非常に氣を腐らして居るのを知り、その原因が主として金の爲であるのを知つて、Cottle さ云ふ本屋を通して彼は Coleridge に匿名で 300 磅を送つた、Coleridge の受取の日附は 1807 年十一月十二日になつて居る。

1808 年は Oxford に居つたことになつて居るけれども De Quincey はロンドンに居る方が多かつた。Coleridge は彼をロンドンに惹き付けた物の一つであつた。此年の秋十一月に彼は第二回目に Wordsworth を Grasmere に訪ねて翌年の二月迄逗留して居た、此時分 Wordsworth は *Courier* さ云ふ新聞に出した政治上のこゝを論じた繼續した手紙を書くのに忙しかつた。これは後に一冊の小冊子になつて、1809 年の五月 *Concerning the Relations of Great Britain, Spain, and Portugal, as affected by the Convention of Cintra* さ云ふ名で出版された。ロンドンに歸つて後 De Quincey は之が校正の任に當り且 Notes を附録に附けた。Wordsworth は此 Notes を “done in a masterly manner” さ云つて稱賛し、Dorothy は大に感謝の意を表はし、彼に Grasmere に來て休養する様に勧めて居る。

1809 年二十四才の時彼は Wordsworth が 1799 年から 1807 年迄住んで居た家を借りる様になり、十一月に Grasmere の Town-end の Wordsworth の家に移つて所謂 Lakists の一人となつた。彼は二十七年間此家を借りて居たが、その中の二十年以上は彼の “headquarters” であり “nominal home” に過ぎなかつた、休息する時に重に居る所に過ぎなかつたのである。

これから凡そ四年程後に、その性質は明瞭に誌してないが、何か金錢上の不幸に出會つて、此時も叔父の Colonel Penson の世話になつて居るやうである。彼の病氣が又烈しくなつて、彼が遂

に “regular and confirmed opium-eater” になつたのも此頃——1813 年——であつた。然し彼が “pains of opium” の苦い経験を嘗めたのは尙後年のことである。同時に彼は哲學の研究を進めて居た、そして倫理學の大著を計畫したのも此頃であつた。然し残念なことはこの計畫は實現しなかつた。此頃ロンドンへも時々行つた様に見える、そして Edinburgh にも行つたことがある、が De Quincey は當時はまた少數の識者にのみ博覽強記の學者として又座談の巧な人として、知られて居たに過ぎない、外部の一般社會には少しも知られなかつた。

1816 年に De Quincey は結婚した。妻となつた婦人は Margaret Simpson と云ふ Westmoreland の所謂 “statesman” 即 hereditary farmer の娘であつた。二人の間には八人の子供が出來たが、その内三人は彼よりも早く世を去つた、そして彼の妻は 1837 年に彼より二十二年も早く彼の世の人となつてしまつた、それは後のことだが、此結婚は彼に幸福を齎した様に見える——時折阿片飲用の爲に苦んたことを除けば——、と云ふのは此後間もなく阿片飲用が烈しくなつて、一時はサーキの魔力にかゝつた様にどんな仕事も出來なくなつてしまつたのであつた。彼は夜な夜な恐ろしい夢にうなされた、彼は夜の來るのを恐れた、夜になれば眠らなければならない、眠れは必ず恐ろしい夢にうなされたからである。然し此等の夢は De Quincey の “impassioned imaginative writings” に於て大切な役目をして居る。彼は此等の夢の一部を *Confessions* や *English Mail Coach* の *The Glory of Motion* や *Dream Fugue* の中で魅力ある筆で精しく誌して居る。

1817 年から 1818 年一杯又 1819 年に入つてからも彼は阿片の魔力の下にあつて殆ど何事をするこゝも出來なかつたが、1818 年に David Ricardo の *Principles of Political Economy* を讀んで非常に興味を感じ、幾度も幾度も之を讀み非常に Ricardo を稱讃し

た。彼は此本に刺戟されて生じた自分の思想を書き始めた “*Prolegomena to all Future Systems of Political Economy*” と名付けられた小冊子の原稿が出来始めた、そして此本の廣告迄もされた、其時又阿片の魔力が働き出して原稿は未完のまゝ残された。然し 1819 年には阿片の束縛を脱することに一層成功して、彼の所謂 “triumph” なるものを勝ち得たのであつた、同時に彼は必要に追はれて書くことを始めた。1819 年にはその前年に始められた保守黨の機關紙 *Westmoreland* の主筆になつた。けれども一年で之を退いて、翌年は *Edinburgh* に行つて雑誌に關係した仕事をさがした。然し De Quincey が文壇の巨星として初めて現れたのは *Edinburgh* でなくて *London* であつた。*The London Magazine* の 1821 年の九月及十月號に、匿名の *The Confessions of an English Opium-Eater* と云ふ文章が現はれた。當時の *London Magazine* は第一流の雑誌で、その寄稿家中には文名を不朽に傳へた人々が幾人かあつた。Charles Lamb は *Elia* と云ふ名で essays を出して居たし、Keats はその詩を送つた。Hood は sub-editor の様なことをして居た、そして Carlyle は *The Life of Friedrich Schiller* を少しづつ發表して居た。De Quincey の *Confessions* は大成功であつた、これによつて彼の進路は決せられた。彼は此時から殆ど死ぬ時迄始終雑誌に寄稿して居た、そして殆どあらゆる題目に就いて書いた。Masson の編輯した十四卷の彼の全集を見る人は De Quincey の文學に對する貢獻の範圍の廣いのに驚くであらう。

最初は、彼の書いたものの大部分は *London Magazine* に送られた。その後 1826 年に *Edinburgh* の雑誌 *Blackwood's Magazine* に寄稿し始めた。1830 年に De Quincey は遂に Lake District に別れを告げて *Edinburgh* に居住する様になつた。彼は *Blackwood* の外 *Tail's Magazine*, 後には *Hogg's Instructor* にも書いた、又 *Encyclopadia Britannica* にも幾つか傳記を書いた。1837 年に Mrs.

De Quincey は死んだ、そして 1840 年に De Quincey の子供達は Edinburgh に近い Lasswade に居を移した。彼は實際は Edinburgh で時を過すことが多かつたけれども、彼の家は彼が世を去る迄ここにあつた。1851 年から 1859 年迄は、色々の雑誌に寄稿したものを纏めて全集を出す爲めに全力を盡した。アメリカでは彼の人氣は非常なものたつたので Field が云ふ出版業者は彼の全集を出し始めた。これに示唆を得て 1853 年には *Hogg's Instructor* の發行者の Hogg は同様な企てに對して De Quincey の同意を求めたのであつた。此集の第一巻は 1853 年に現れ、最後の巻は De Quincey の死んだ一年後に現れた、全部十四巻の中十三巻は彼の生前に現れたのである。De Quincey は 1859 年十二月八日に七十四歳で世を去つた。

II. DE QUINCEY のその作物

De Quincey は非常に博學であつた。Masson は彼を “poly-histor” (=man of varied learning) と呼んで居る、實に彼はあらゆることを知り、又あらゆることに就いて書いて居る。しかも De Quincey はあらゆることに於て専門家である様に見える。歴史に就いて云へば、古代のにも中古のにも近代のにも通じて居た、そして書いたものを見るに、original authorities に精通し新しい學說をも知つて居る人の様に見える。希臘羅馬の文學には云ふ迄もなくよく通じて居た、これは彼の Homer や Herodotus や Greek tragedy なぎに就いて書いたものを見ても分る。彼は又近代の歐羅巴文學に就いても驚く程よく知つて居た。彼は獨逸の哲學者や詩人や文士なぎに就いて書いた。彼は又佛蘭西、西班牙の古典にも造詣が深かつた。彼は又和蘭語もよく出來た。彼の英文學に於ける知識に至つては精しくして深かつた。彼の讀んで居ない文豪

の作物は殆ど無かつた、二流所の作家の物でも大方は知つて居た。過去の文學に通じて居たばかりでなく、當時の文學にも充分な理解があつた。彼は又獨逸文學を英人に紹介した最初の一人であつた、彼は Kant や Richter や Tieck など英譯した。彼は又哲學者で Kant を解説し Plato を批評した。經濟學にも非常な興味を持つたし政治を論じたこともあつた。彼は又著名の人の傳記をも書いた。彼は小説を一つ短い話を幾つか書いて居る。

彼がかう多種多様の知識を持つて居たのは、彼が生れながらに彼の所謂 “an intellectual creature” であつて、あらゆるものに對して curiosity を持ち、inquisitive で、そして又 meditative であつたこと、之に加ふるに強い記憶力を持つて居た爲めであらう。然し彼の博學は決して彼をして判斷の獨立を失はしめることは無かつた。彼は一般の人の意見がかうだからと云つて、その通り只受入れると云ふことは無かつた、必ず自ら之を検討しなければ承知しなかつた。全くこれ程博學で、これ程論理的の頭腦を持つた人は珍らしい。否あの夢幻的傾向を持つた Opium-eater がさうしてこんなに鋭い推理力を持つことが出来るたらうと怪しませる。然し彼の知力はやはり文學的であつた、いかに哲學的な問題を取扱つて居る時でも、それは人の heart に訴へるのであつた。

De Quincey が humour に富んで居たことは人のよく知つて居ることである。彼の書いたものには *Murder Considered as one of the Fine Arts* の様に人を笑はせるものもあるが、もつと穩かな humour は彼の作物の所々に見出すことが出来る。Humour と pathos とは双兒である云ふが、兎に角、De Quincey は humour 以上に pathos に富んで居た。彼は幼い頃から人生の悲みを自ら経験し又他人の不幸をも見聞して居たので、彼の心には常に暗い蔭が宿つて居た。Pariah (これは India の outcasts を意味する言葉であるが、De Quincey は社會の缺陷によつて悲惨な運命に陥つ